

2025年度第38回ヴェリタス祭のご案内

第38回ヴェリタス祭は、2025年10月31日(金)、11月1日(土)の二日間にわたって開催されます。同窓会では卒業生同士の親睦および交流の場として、11月1日(土)に2号館4階にてティールームをオープンいたしますので、ご休憩・ご歓談の際には是非お立ち寄りください。皆さまのお越しをお待ちしております。

聖学院大学同窓会 定期総会のご案内

以下の通り定期総会を開催します。
ご多忙とは存じますが、ご出席の程よろしくをお願いいたします。

日時: 2025年11月1日(土) 11:00~12:00

場所: 聖学院大学7号館7101教室(当日会場の都合により変更となる場合がございます)

議案 ● 2024年度活動報告 ● 2024年度収支決算報告 ● 2025年度事業計画(案)
● 2025年度収支予算(案)

※当日はヴェリタス祭開催中のため、お車でのご来場につきましてはご遠慮下さいますようお願い申し上げます。



聖学院大学同窓会役員募集

聖学院大学同窓会では、活動にご協力いただける役員を募集しております。活動内容は2ヶ月に一回程度のペースで行われる定例役員会(都内にて)への出席、年1回の定期総会の開催、会報誌の発行、ホームページの運営等があります。活動にご興味のある方は下記アドレスにお名前、学籍番号、電話番号及びメールアドレスを記入して送信下さい。役員会の見学希望だけでも構いません。

聖学院大学同窓会メールアドレス
(尚、お返事にお時間頂く場合がありますがご了承ください)

dousou@seigakuin-univ.ac.jp

皆様のご参加を心よりお待ちしております

ご住所等を変更される場合には、同窓会公式ホームページのお問い合わせフォームより変更手続きをお願いいたします。



聖学院大学同窓会会報誌『クロスポイント』 第35号

令和7年10月10日発行

〒362-8585 埼玉県上尾市戸崎1-1 聖学院大学同窓会事務局

E-mail dousou@seigakuin-univ.ac.jp

URL <https://www.seig-dousou.com/>



CROSS POINT



CROSS TALK

社会の課題を
自分事として捉えられる人へ

芦澤 弘子 / 磯田 和久 / 島田 大輔 / 藤波 麻衣 / 野口 和楓 / 竹内 康紘

社会の課題を 自分事として 捉えられる人へ

2025年8月4日、1号館地下1階の「1Cafe」に、学生ボランティア団体「そよかぜ」に所属する3名の本学学生を招き、活動の目的や実態、想いなどを伺う機会を設けました。「そよかぜ」は聖学院大学・埼玉県立大学・立正大学の3大学の学生で構成され、宮城県石巻市と石川県能登町を中心に積極的なボランティア活動を展開しています。本ディスカッションにはボランティア活動支援センターからボランティアコーディネーターである芦澤弘子さんにコメンテーターとして参加いただきました。同窓会は2015年度より同センターと連携して「ボランティア・まちづくり助成金」を立ち上げ、ボランティア活動に取り組む学生を支援しています。



〈GUEST〉心理福祉学科3年 学生団体そよかぜ代表 竹内 康紘(中央左)／子ども教育学科2年 野口 和楓(中央)／心理福祉学科3年 藤波 麻衣(中央右)

〈ファシリテーター〉同窓会常任幹事 磯田 和久(左) 〈ホスト〉同窓会 会長 島田 大輔(右)

はじめに

磯田 本日はよろしくお願いします。同窓会会報誌のインタビューは、聖学院大学の「今」を毎年お届けしています。今年はボランティア活動をテーマに、「そよかぜ」という団体の皆さんにお話を伺います。ではまず簡単に自己紹介をお願いします。

竹内 心理福祉学部心理福祉学科3年の竹内康紘です。大学に入ってからボランティアを始めました。東日本大震災の被災地支援を経て、現在は石川県能登町を中心に活動しています。「そよかぜ」という団体の代表を務めています。

野口 人文学部子ども教育学科2年の野口和楓です。大学に入ってからボランティアを始めました。主に防災関係の活動をしていて、竹内さんと同じく能登での活動が多いです。これからは東北の活動にも参加していきます。

藤波 心理福祉学部心理福祉学科3年の藤波麻衣です。団体としては能登の活動や東北ボランティアスタディツアーに参加し、個人ではフードパントリーでのボランティアもしています。団体と個人、両方の軸で関わっている形です。

磯田 ありがとうございます。ちなみに、竹内さんは、一般財団法人学生サポートセンターが実施する『令和6年度学生ボランティア活動体験レポート募集事業』に応募され、これが「優秀レポート」として採択されました。さて、島田会長、同窓会の助成金事業で学内のボランティア団体に向けてどのような支援を行っているか具体的に教えていただけますか。

島田 私たちの時代から、ボランティア活動は聖学院の1つの特徴で、活発な大学だと思います。特に「そよかぜ」のように積極的に活動している団体が学外に知られることは、学生募集において大きな強みになります。同窓会としても、こうした取り組みを卒業生に伝えることで、支援の輪が広がることを期待しています。さらに毎年6月に行われる「ボランティア・まちづくり活動助成事業」の公開審査会を通じて、「そよかぜ」をはじめとする各種団体に対し、金銭面での支援を行なっています。

「そよかぜ」という名前の由来

磯田 今日は「そよかぜ」の具体的な活動を色々伺っていきたいと思います。まず、「そよかぜ」という団体名はどのような経緯で決まったのか教えていただけますか。

竹内 「風」という言葉を入れたいね、でも「暴風」じゃ強すぎるよね、と話していて。そよ風は春夏秋冬いつ吹いても心地がよいので、被災地で活動する中で少しでも心地の良い風が入っていけばいいなという気持ちから名づけました。活動中に「そよかぜが吹いてきたな」と声をかけてもらえることがあって、わかりやすい言葉で認知いただいているのかなと思います。

磯田 そのような由来があるんですね。では、そよかぜの具体的な活動内容や実績を詳しく教えていただけますか。

竹内 被災地支援を軸として、大きく3つあります。1つ目は石巻市震災遺構大川小学校を訪ねたり、3月から11月頃にかけて月1回のペースで石川県能登町の大乗寺で行われる「つなぐマーケット」というイベントを実施している間に子どもたちの面倒を見たりしています。2つ目は石川県能登町で瓦礫の片付けや、地域のお祭りやイベントのお手伝いをしています。3つ目はそれを踏まえて、関東の埼玉県や東京都で被災地のことを伝える活動を行ったり、能登の商品を販売して活動資金を少し補ったりしています。



島田 商品の販売はネット通販ですか？

竹内 いえ、基本はイベントなどでの対面販売です。社会福祉協議会や主催の方と連携して被災地のことも発信しているので、被災地を支援したいとの思いで買っていただけることも多いです。

磯田 つなぐマーケットや能登町のボランティアは何名くらい参加されるのですか。

藤波 そよかぜのメンバーは全部で29名おりまして、希望者を募って最大10名程度が参加します。交通手段は新幹線やレンタカーで、人数が多い時はハイエースを借りて運転免許を持っている学生が交代で運転します。

竹内 今年の9月には教職員合わせて21名でボランティアに行く予定なのでマイクロバス1台を借りるのですが、参加者の内訳は聖学院大学の学生が7名、立正大学の学生が1名、他は私の出身校である自由の森学園高校の高校生たちです。現在「そよかぜ」には聖学院の学生、卒業生以外にも、立正大学、埼玉県立大学などの県内の学生、東洋大学や日本大学に在学している私の高校時代の旧友も在籍しています。

島田 私たちの時代から比べて、かなり幅広い構成になっているんですね。



ボランティアを始めたきっかけ

磯田 お話を伺っていると皆さんがボランティアを始めた起源も気になります。始めようと思ったきっかけを教えていただけますか。

藤波 最初はフリースクールでのボランティアがきっかけです。学んでいる分野の中で、とりわけ不登校支援に興味がありました。本学はフリースクールとのつながりが強く、長期休みを活用してボランティア活動支援センターからの紹介で「まずは行ってみよう」と思い切って参加しました。その後暫くボランティアに行けませんでした。冬、「東北ボランティアスタディツアー」の話を聞いて、震災のことを学びたいという気持ちから参加して今に至ります。

野口 高校時代から防災に興味があり、竹内さんに能登に誘われたのがきっかけで大学からボランティアを始めるようになりました。最初に行ったのは昨年のゴールデンウィークで、主に被災された方のお家の片付けだったのですが、それからいろんなことを学びたいと思うようになりました。今では防災や能登について発表する機会もあります。最初は表に立って発表するようなことは向いていないと思っていましたが、実際にやってみると意外と楽しんでいる自分がいて、継続していることに自分自身が驚いています。

竹内 本格的に始めたのは大学に入ってからです。東北にはずっと関心があったのですが、高校時代に学校で行っている福島スタディツアーに2年間参加して、現地の声や状況は実際に行かないと感じられないことが多くあるという感覚を味わいました。その後、先生の紹介で聖学院大学に進学し、ボランティア活動支援センターを訪れ、そこから東北での活動が始まりました。その後、能登半島地震をきっかけに能登へ通うことになるのですが、当初こんなにやることになるとは思っていませんでした。最初は個人でのボランティアだったのですが、シンプルにこの町が好きになり、支えるというより何年後かに観光で普通に来られるような町にしたいと思うようになりました。その思いを実現するためには、1人では難しいし、この好きな町や活動をみんなと一緒にやりたいという気持ちがあったので、その手段として昨年の5月に「そよかぜ」という団体を設立しました。

島田 団体設立からは日が浅いんですね。

竹内 そうですね、ちょうど1年ぐらい前のことです。もともと東北で自分たちの活動をやろうという話はあったんです。ただ、発起人として自分がやるかどうか迷っていた時に、能登でボランティア活動が始まったので、

ここでやるしかないと思って、自分の中で決心がつかしました。それから仲間を集めて、最初は8人くらいだったのですが、だんだん増えていって、今に至ります。

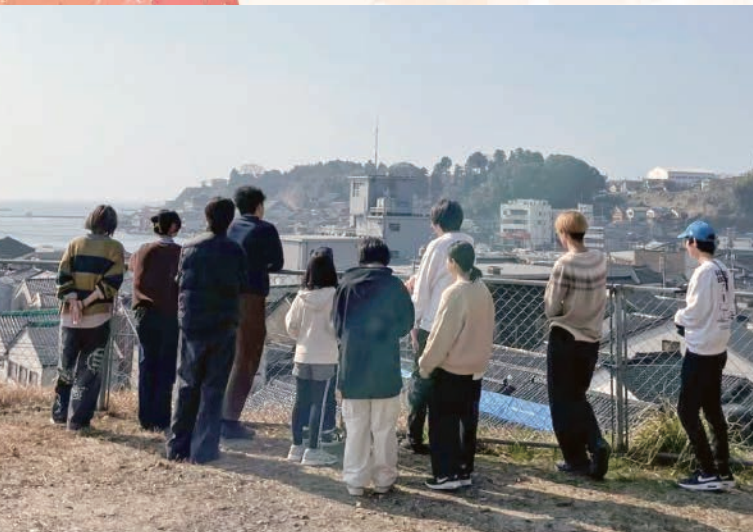
磯田 聖学院大学との接点は高校時代にもあったのですか。

竹内 聖学院大学との接点はコロナ禍のオンラインスタディツアーに参加した時からです。大川小のガイドを聞いたり、聖学院大学の学生と交流した時にすごく面白いなと感じたのがずっと胸の中に残っていました。今では逆の立場となって、去年の10月には出身校である自由の森学園の外部講師として野口さんと一緒に能登の現状について報告させてもらうこともありました。また寮で暮らしている生徒に卒業後の進路を考えてもらうために大学生活はどんなことをするのか伝えたり、今年の9月のように一緒に能登に行ったりする形で関わっています。

印象的な体験

磯田 もう少しボランティア活動の体験などを伺いたいと思います。ボランティア先での意外な体験や、今でも印象に残る思い出、またよくある話などをお聞かせいただけますか。

竹内 到着した瞬間に子どもたちがわあっとやってきてくれるのは毎回嬉しいですね。一番記憶に残っているのは、去年のゴールデンウィークに能登で一人住まいのおばあさんのお宅を片付けた時のことです。ゴミ出しをととても遠慮されていたのを不思議に思って話を聞いてみると、以前ゴミの出し方について厳しく言われたことがあるようでした。被災したごみや石・土などの受け入れがダメだったり結構厳しいのですが、私は何度もゴミ出しの現場に行っていたので、なんとか持ってきますよということをお伝えしたらとても感謝されました。ゴミ出しを終えて、おばあさんと1時間ほど話してみると、旦那さんを地震で亡くされており、家屋への被害があったこと、町へのバスが減便されて不便だと仰っていました。ストレスから体調も悪く、お腹が弱くて食事がうまく取れない、菌も抜けて辛いとお話しされていたので、8月に再訪して買い物と一緒にいたり、お話をしましうとお声がけをしたらすごく元気になって、実際に一緒に買い物行くとすぐに知り合いに話しかけられている姿が見られました。自分に関わっていくうちにこんなに元気になっていくんだなという感覚がありましたね。



野口 この時期ならではというと、暑さでしょうか。能登地方は日本海側なので暑さはそんなに厳しくなくて、どちらかというと関東の方が異常なぐらいなのですが、決して油断できるものではありません。8月に伺った際は撤去した木材パーツを解体する作業をしていたのですが、帰る頃には頭痛もあり、熱中症になっていたように思います。夏場の屋外作業は気をつけなければいけないと思いました。

藤波 この団体に入ったのは今年の3月で、能登には3月と5月の2回しか伺えていないこともあり、他のメンバーみたいに子どもたちとの関係性ができているわけではありません。2人は子どもたちからも名前を覚えられていて「和楓くん来るの?」って楽しみにしているのですが、自分はまだスタートしたばかりで、子どもたちの前ではお互い緊張もあって、なかなかうまく関わられませんでした。そんな中、5月に印象的な出来事がありました。3月にも会っていたけれど自分のことを覚えていなかった女の子に挨拶したら、最初はうなずくだけでとても緊張していたんです。それでも輪投げと一緒にやったり、人がいない時に少し話してみたりして過ごすうちに、だんだん距離が縮まってきました。ある時、その子が自分にお菓子の袋を持ってきて「開けて」と頼んでくれたんです。最初は緊張して警戒していた子が、自分を頼れる存在だと思ってくれた、それが本当に印象に残っています。最初は「自分には向いていないかも」と思ったりもしたけれど、一緒に活動している他の学生の子どもへの接し方を観察して、自分も真似してやってみることで少しずつ手応えを感じられました。自分とその子だけの関係性があるのだと思えたり、次に行ったときは自分の好きなキャラクターをきっかけにさらに話が広がるかもしれないと思いました。2回しか行っていないけれども、その中でつながれたこと、頼ってもらえたことが大きな経験になりました。

活動の課題

磯田 とても充実したお話もありましたが、逆にボランティアで大変苦勞したことや、それをどう乗り越えたか、といった具体的なお話もお伺いできますか。

野口 やっぱ一番は交通費です。今年のゴールデンウィークも交通費で結構悩んでいて、周りの方から行かないの?と声をかけられても、行きたい気持ちはやまやまなんだけれども交通費が…、という思いがありました。

竹内 特に被災地ボランティアにおいては「行かないと始まらない」というということがあまりにも多いです。そこで広がるつながりも活動もあるので、まずは行くということが一番大事なのですが、交通費はとて高いハードルになっています。今年の同窓会からいただいた助成金も、交通費で申請させていただきました。往復で一人当たり3~4万円かかるので、バイトの1ヶ月分が飛んでいってしまうような感じですね。流石にその状態は良くないということで、5人以上の活動に限定されますが、今年の2月から始まったシステムで内閣府が年間200万円まで交通費を補助してくれる制度を活用しています。例えば3月に10人で能登に行くのに富山まで新幹線、そこからハイエースを借りると往復で大体30万ぐらいかかるので、それを内閣府の交通費補助という形で賄っています。昨年度は完全に自腹でした。

島田 同窓会からも協力がますます必要になってきますね。審査会でも交通費の申請については議論になりました。短距離の移動の交通費を支援することについては議論の余地が残りますが、彼らのように能登や石巻に行く交通費は、学生からみてかなり大きい額だよなという話になって、長距離は支援しようという形になりました。

竹内 正直、今年の助成金の申請は少し厳しいかなと思っていました。交通費は被災地支援には直接つながっているところではないなと思いつつも、結果的に助成いただきました。その支援があるかないかで、本当に費用負担が変わってくるので、ありがたい限りですね。私が実習や用事で行けない時に、みんなに一律で1万円の補助として使わせていただこうかなと思っています。

島田 今日のお話を伺っていると、同窓会の支援が学生の役に立っていて、我々としても支援した意義があると感じます。同窓会の助成金はこれからもぜひ続けていきたいです。

後輩不足と未来への不安

磯田 資金面の克服はやはり大きなテーマですね。他にはどんな課題がありますか？

藤波 この先を担う「人」の課題があります。今のそよかぜは3年生が中心で1、2年生の人数が少ないので、今の活動形態をずっと続けていくというのは厳しいかなと感じています。そよかぜの未来を考える会を立てようかと、今まさに議論しています。

磯田 課題として「人」の問題が出ましたね。そよかぜという組織を、皆さんがどのようにしていきたいか、ビジョンや思いを聞かせていただきたいと思います。また、ボランティアへの皆さん自身の今後の関わり方とか、やってみたいこととか、方法論など教えていただけますか。

藤波 自分たちが大学を卒業した後に、団体として能登や石巻とのつながりが途切れてしまうのはすごく寂しいと感じています。子どもたちと直接の連絡手段は持っていませんが、「どうして来ないの?」と聞かれたときに「もう大学を卒業したから君たちと会わないだよ」なんて伝えられたら、子どもたちがどう思うのだろうかと考えます。今関わりのある能登の子どもたちは小中学生くらいなので、もしつながりが続けば、その子たちが成長していく姿を見守っていける。そういう関係性は大切にしたいと思っています。頻度は減っても、細く長く関わりを続けていければと考えています。将来的には、不登校やヤングケアラー、生活困窮といった課題を抱える子どもたちを支援したいと思っています。最近では、生活困窮世帯の子どもたちに居場所を提供する団体があって、そういう活動にボランティアや職員として関わってみたいという気持ちが強まっています。ヤングケアラー支援はまだまだ遅れているので、地域でどう取り組むか、社会福祉協議会の活動もとても関心があります。地域課題として捉えながら、専門職としての立場とボランティアの視点を組み合わせ進んでいきたいです。

野口 私は2年生ですが、子ども教育学科からは自分一人なので、同じ学科はもちろん、もっと学年や学科を越えて仲間を巻き込んで、能登や東北にも興味を持ってもらえるような活動ができればいいなと思っています。

竹内 後輩がいないとか未来を考えることとか色々ありますが、明るいことを言えば、まずはこれまで積み重ねてきたものがあると思っています。子どもたちからすると、大人でもなく近すぎもしない大学生って「ちょうどいい存在」なんですよ。共通の話題もあるし、例えば自分がやっているスマホゲームが能登の子どもたちに流行っていて一緒に遊んだり、ポケモンの話題で盛り上がりたり。そういう「ちょうどいい距離感」がすごく大事だと思います。個人的には、もう能登町に移り住んでしまおうかと考えています。課題は後継者とお金、それから学生が運転をするという

かなりリスクの高いことをしている点です。昨年の9月に現地を訪れた際はちょうど奥能登豪雨のタイミングだったので、豪雨からいかに身を守るかを自分たちで判断しなければいけない環境にも置かれました。事故を起こした時にどうするかということもあります。このまま継続するのか、現地に行く機能を分離させるのか、それとも団体を法人化するのか。大きく分ければそのくらいの選択肢に絞られるとも思っています。自分としては法人化や存続の道を模索したいですが、簡単ではありません。これから1年半かけて、じっくり考えていければと思います。

島田 これだけ活発に活動している学生は、聖学院大学に限らず少ないのではないのでしょうか。お金というのはきれいに引きで非常にシビアな問題だと思います。我々卒業生が彼らの活動をお金という面でバックアップできて、それが彼らの活動のモチベーションにつながるのであれば、それは同窓会の存在意義の一つでもあるのだと思います。今後とも、こういった学生を支援していきたいと思います。



ボランティアを通じて得たもの

磯田 これまでの活動を通じて、それぞれどんな学びや成長を感じていますか？

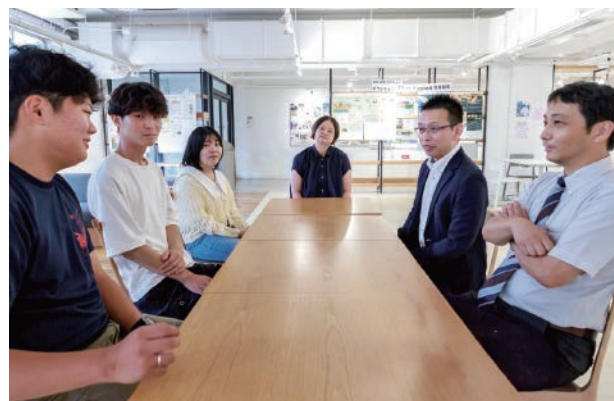
藤波 全身全霊で行くというか、全力でその場でできることは何かと自分の中で考えるからこそ、ボランティアが終わってから自分って全然できないなと立ち返る瞬間もあります。やりたいと思ってたことが全然できなかったとか、伝える言葉が欲しかったけど表現できなかったとか、自分が緊張してしまっ関われなかったとか、いろいろあります。そこで「自分が全然できない人間だ」と自己否定するのはとても簡単ですが、そういうところから立ち返って「次はこうしてみよう」と前向きに考えられるようになりました。失敗も学びに変えられるようになったのは大きな成長だと思います。ボランティアはある意味マニュアルが全然ないので、自分で考えて動いてフィードバックして、を繰り返すという力は、ボランティアで得られたかなと思います。

野口 自分は誰かのために何かをするのが好きなんだと最近思い始めています。誰かを支えるとか、誰かのために何かをすれば、いい影響を与えられることができるんじゃないかと思っていて、0.1%でもいいからその人の考え方を、良い方向に変えさせてあげたいと思っています。将来は子どもと関わる仕事に就きたいと思っています。保育や教育の現場で「頼りにされる存在」になりたいです。

竹内 二つあります。一つは自分が担うのは旅行会社のように現地までの交通手段を用意して現地とつなぐという業務なので、それがある意味、学生のうちからできるというのはすごいことです。自分の得手不得手を知ることができたのはこれから社会に出ていく上で大事だなと思います。そよかぜの活動は、苦手なところをどうやってうまくやっていくか実践できる場にもなっていると思います。もう一つは仲間と共有できる喜びです。旅行が好きで、いろんな土地でいろんなものを見るのが好きなのですが、それを友達と一緒に体験したときの喜びは今でも残っています。そよかぜは楽しいことを無理なくやるということを一番のモットーにしているので、今はその延長なんですよ。自分が一番嬉しいのは、体験を共有した仲間が「1人で能登に行こうかな」と思ってくれるようになった時が、やっぱりすごく認められた気持ちになって、もう生きがいだなと思います。

島田 我々同窓会も今、非常に人が足りてない状態で、少人数でなんとか回している状況です。ある意味、同窓会の活動もボランティアみたいなものなので、もし卒業後、まだ大学に対して思いがあれば、ぜひとも同窓会に参加していただくと嬉しいです。これまで支援を受ける側だった皆さんが、今度は支援する側に回ることも十分あり得ますし、仲間が増えればできることも広がります。皆さんのように行動的で熱意のある人材を私たちは本当に求めています。また皆さんだけでなく、もし卒業後も大学に思いを寄せている方がおられるなら、同窓会活動にも奮ってご参加いただけたらとても嬉しく思います。

磯田 今日は同窓会の会報誌のインタビューで皆さんの活動内容や今後のことについて伺いましたが、どのような活動をしているかについては「見える化」していくことも大切なことだと思います。そのうちの1つが先ほどの同窓会の取り組み、バックアップというところでもありますし、また違う形でも模索していきたいと思います。同窓会は卒業生の組織ですが、在学生に対しても支援したいという思いを強く持っていますので、いろいろお声がけをいただいて、今後とも良い関係を築いていきたいと思います。本日はありがとうございました。



芦澤 弘子(右)

磯田 聖学院大学におけるボランティア活動への取り組みを概括していただけますか。

芦澤 聖学院大学は設立された当初から、「神を仰ぎ 人に仕う」という建学の理念に基づいて、特にキリスト教センターを中心に、学生たちのボランティア活動が活発に行われてきました。契機は2011年3月11日の東日本大震災です。学生自身の故郷が東北にあったりとか、親戚や家族が東北に住んでいたという事で、当時の学生たちの多くは自分事として捉えていました。大学の当時の職員と相談しながら大きな活動をしたり、中には自力で東北に駆けつけた学生もありました。そういった学生

たちの活動を大学としてバックアップしようということで、翌年2012年の4月にボランティア活動支援センターが設立されました。

磯田 ボランティア活動は大学教育の中でどのような位置付けになりますか。

芦澤 大学は教育と社会へ巣立っていくところの橋渡しの4年間になります。巣立っていく社会は自分が関わる仕事以外にもいろいろな課題があります。実際の社会で一つひとつの社会課題を他人事にしてしまうと、より社会は悪くなっていくと思います。そういった社会の課題を自分事として捉えることのできる人を育てるというのがボランティア活動支援センターの使命だと考えています。自分事として捉えるというのはそれぞれ学生が関心のあるところでキャッチできればいいかなと思います。というのも本当に色々な課題があるし、複雑化しているので、すべてをキャッチすると、それはそれで逆に疲弊してしまいます。自分がこれを解決したいとか、これをテーマに掲げながら社会を歩んでいきたいというものを見つけてくれたらいいなと思っています。社会課題に関わる中で、苦しさもあるけれども少しずつ社会が良くなって、例えば、目の前の子どもが笑顔になっていくってところで達成感もあると思うんですよね。そういった達成感や喜びを得ながら、自分のテーマをブレずに社会生活を送ってほしいです。そのために、ボランティア活動支援センターで4年間をしっかりとサポートしていきたいと考えています。



最近の主な活動



2024年

11月

第37回ヴェリタス祭

2024年11月1日(金)、11月2日(土)の2日間にわたって、第37回ヴェリタス祭が開催されました。同窓会では2日(土)に2号館4階にて卒業生の親睦、交流の場としてティールームをオープンし、多くの卒業生にご来場いただきました。ティールームではソフトドリンクやお菓子の提供の他、歴代の卒業アルバムをご用意しており、ご来場者された同窓生はアルバムを眺めながら、近況の報告や思い出話を花を咲かせておりました。また聖学院大学7号館7101教室において、定期総会を開催しました。議事次第および議事録は聖学院大学同窓会の公式noteにて公開しています。
(https://note.com/seig_dousou/)



2025年

6月

集中会議

例年5月下旬から6月上旬に1泊2日で行っていた研修会合宿でしたが、昨今の宿泊費の高騰等の影響から今年度も昨年同様宿泊研修を見送り、2025年6月14日(土)に赤羽にて集中会議を実施しました。今後の学生支援の在り方について、また同窓会の中長期計画について、など様々な視点から意見やアイデアが出されました。



2025年

6月

聖学院大学ボランティア・まちづくり活動
助成事業公開審査会&ドネーションパーティー

同窓会では毎年、学生のボランティア活動を応援しています。本事業は社会福祉法人上尾市社会福祉協議会(赤い羽根共同募金)との共催で、地域の課題解決やSDGsの課題に真剣に取り組んでいるゼミや団体を対象に助成金を交付する事業です。助成先の選考と助成額の決定は公開審査によって行われます。今年度も聖学院大学ボランティア活動支援センター／地域連携・教育センターならびに社会福祉法人上尾市社会福祉協議会の共催による公開審査会が2025年6月21日(土)に大学キャンパス4号館4401教室

で開催されました。同窓会からは役員2名が審査員として出席しました。審査員の中には、ボランティア活動支援センター副所長の長嶋先生のほかサステナビリティセンター副所長久保田先生が今年から参加され、また地域のボランティア活動で活躍されている方、ボランティア経験のある卒業生や赤い羽根審査員として上尾市内の中学生にも助成事業とは別に赤い羽根助成金の審査に参加してもらいました。参加団体は限られた時間の中で自分たちの活動を趣向を凝らし、アピールすることが求められます。プレゼンテーションを聴いた審査員、赤い羽根審査員からは多くの質問が寄せられ、各参加団体は真摯に回答していました。そのプレゼンテーションをもとにそれぞれの助成や同日開催されているドネーションパーティーで審査員以外の参加者からの寄付が受けられます。

今年度は5団体のうち、4団体の助成が決定し、1団体は条件付きの助成が決定しましたが、それぞれの活動が工夫を凝らして活動していく様子やこれからやりたい活動を計画していることがわかりました。今後とも同窓会では学友会活動や卒業関連事業、今回のボランティア・まちづくり活動助成事業への支援を通じて、学生たちが快適なキャンパスライフを送るための協力を継続的に行なっていきたいと考えています。

学生・卒業生の
活動関連サイト・SNS

そよかぜ
Instagram

<https://www.instagram.com/gosoyokaze/>



Vois SEIG
学生団体情報サイト

<https://seig-peernews.jimdofree.com/>



聖学院大学
ヴェリタス祭のご案内

https://x.com/seig_veritas



法人広報センターの
卒業生紹介サイト

<https://note.seig.ac.jp/m/m234a0dd3901d>

